

『東方』三〇三号より

## 「気の宗教」の本質

山田 利明(東洋大学)

道教とは何か、つまり道教の定義を求めようとする問いかけが起つたのは、いまから三十数年前に溯ぼる。それは、日本で初めて開催された道教の国際会議(第二回国際道教研究会議・一九七二年九月)の席上であつた。

日本人研究者の用いる「道教」という言葉と、欧米人研究者の用いる「タオイズム Taoism」という言葉の間に、かなりの乖離があつて、しばしば議論が混乱した。そこから道教を定義しようとする提案がなされたと聞いている。以来、いくつかの試案が示されたが、定説化されたものはない。ただし、欧米の研究者の多くは、その後フランス高等研究院(E. P. H. E.)の教授となり数年前に退官したクリストファー・シペール氏K.Schipperのいう、「道蔵」(道教の一切経)の中に記された信仰・儀礼・思想こそが道教であり、それ以外の信仰は他の民間信仰とする説を支持している。最近の日本の研究者の間でも、この説は比較的広く行われているように思われるが、十五世紀中期に編纂された現行道教による限り、それ以後の信仰や儀礼は無視されることになる。ただ、この考え方はきわめて合理的であり、説得力もある。

### 本書の内容

#### 道教をめぐるQ & A

#### 第一章 さまざまな神々を祀る宮廟

#### 第二章 仙人たちの姿と伝記

▶ トップページにもどる

坂出祥伸著

『道教とはなにか』

四六判・三〇八頁・中央公論新社・一、八九〇円



#### 第三章 房中術・導引・禹歩——道教に取り込まれる古代の方術(二)

##### 代の方術(二)

#### 第四章 呪言——道教に取り込まれる古代の方術(二)

#### 第五章 呪符——道教に取り込まれる古代の方術(三)

#### 第六章 煉丹術の成立と展開——外丹の場合

#### 第七章 道教と医薬

#### 第八章 道教の歴史

#### 第九章 日本文化と道教

#### 第十章 現代の道教と気功事情

本書の著者坂出祥伸氏は、周知のように道教の得仙法(仙人になる方法)を主要な研究テーマとし、鍊金術や気功、仙薬法について優れた業績を残されてきた研究者である。以前、評者は本欄において同氏の著書を評して、「中国思想の形而下的展開」(『東方』一三六号、一九九二年七

月」と論じたことがある。それは氏が専ら身体論を中心に  
して中国思想の研究を展開されていたからであり、その視  
点は本書の底流にもある。ただ、目次を一覧すればわかる  
ように、本書には、呪言<sup>まじない</sup>や符、あるいは神格という身体論  
以外の領域にまで拡大された著者の研究が収められている  
ところが、一読すれば、こうした一見身体論とは関係のな  
い領域の研究が、実は「氣」という中国思想上の独特の概  
念で結ばれていることがわかる。

本書冒頭に、「道教をめぐるQ&A」という導入部を設  
けて、問答形式によつて道教の輪郭を示そうとするのだが、  
その中で『道教は』目に見えない「氣」という存在に根拠  
を置き、ここから天地万物が生成展開すると考えます。……  
一言でいうと道教は「氣の宗教」といつてよいでしょう』  
という。著者のもつ道教理解の基盤はここにある。確かに、  
道教にはその儀礼においても、方術(不老不死の技術や呪  
術的技術)においても、氣を思念したり、その作用を用い  
たりすることが多い。道教文献の表現では、しばしば神あ  
るいは精神などと記されるが、実態は氣として理解すべき  
ことが少なくない。特に身体論に至っては、ほとんどが氣  
による解釈といつても過言ではない。

本書中に解説される方術の多くも、この観点から説明さ  
れている。広く知られるように、房中術は男性の陽氣と女  
性の陰氣をテーマとする技法であるし、導引は氣そのもの  
の呼吸法と循環を説き、禹歩という特殊なステップも、宇  
宙の氣との結合を目的とするといえる。著名なアメリカの  
道教研究者であつたエドワード・シェファー博士  
E.Schafer は、禹歩を Pacing the Void, すなわち「宇  
宙の歩行」と称した。呪文や符もまた神氣を用いる一方法  
である。そしてその氣は、宇宙を構成し、万物を作りあげ

▶ トップページにもどる

る元素であり、身体内を巡る生命の源流でもある。

したがって、漢方医学がことの外この氣を重視するのは  
当然といえるが、漢方薬学においても、その薬のもつ「薬  
氣」の効能が全てとされる。このように見ると、著者のい  
う「氣の宗教」という表現は、まことに当を得たものとい  
える。しかしながら、本書で記される範囲は、信仰の実態  
としての儀礼や方術であつて、教理そのものからの解明で  
はない。おそらく著者は、道教信仰の実態を通して、そこ  
に道教の本質を投映しようと考えたのであろう。

実は、著者のこの観点は、評者の観点といささか異なる。  
著者の道教に対する理解は、「道教は本来、遠く古い時代  
から伝わる呪術を基礎として成立したものです。ですから  
道教の初期には、主として呪符、呪言、攘(禳)災術など  
による呪術が行われているのですが、……道教を権威づけ  
る必要から、仏教に対抗して尊像や經典が作られ……老子  
や莊子などが道教に取り入れられるのは、こういう背景が  
あつたと思われます」というところに如実にあらわれてい  
るように、道教は老子や莊子とは関わりなく発生したと考  
えられている。

確かに仏教に対抗して多くの經典が作られたのは事実で  
あるが、後漢の時にはすでに老子は神仙として黄帝ととも  
に祭祀されていた。初期の道教が、老子と全く関わりなく  
成立したと判断されるには、五斗米道で『老子』が唱誦さ  
れたという記録や、太平道で信仰されたとされる中黄太乙  
神の記録を否定する必要がある、と思われるがどうであろ  
う。太乙(太一)神は漢代の道家の中から生れたという説  
もある。もっとも、これらの記録は後代のものであつて、  
まさしく道教の確立期に書かれたということもできる。そ  
の一方では、四世紀初頭の『抱朴子』には、老子に対する強

い尊崇の念を示すものもある。また、漢代の道家(黄老家)が多くの方術的要素を備えたものであったことも、今日では普通に論じられている。例えば五斗米道や太平道が当面の目的を病気の治癒や災厄の消除においたとしても、病気や災厄をその都度のり越えられれば、必然的に不老不死に結びつく。

いうまでもなく、五斗米道や太平道の文献資料はきわめて少なく、それらを見る限り、老子や莊子との関係は稀薄である。特に莊子はその名さえ現われない。また、現存の『太平経』にしても、後人の手が加えられていることは明瞭であつて、後漢代の『太平清領書』そのものではない。しかし、『老子』の説く「道」の効用にあずかろうとする考え方は、漢代の道家そのもののあり方ではないだろうか。

ところで、気は万物を作り、宇宙を形成する大本<sup>おもと</sup>と考えらるなら、道と気は相い等しい。道との一体化は仙人になるための方法である。道⇨神⇨気という図式がなり立つ所以であるが、その基盤には、『老子』の「道の道とすべきは常の道にあらず。名の名づくべきは常の名にあらず。無名こそ天地の始にして、有名は万物の母」という認識がある。この一句は、「道という言葉で認識されてしまえば、もうそれは道ではなくなる。言葉として認識し得る以前の、混沌とした有とも無ともつかない世界から、天地が生じてそこから全てのものが生れた」という元始の世界観を述べたものと考えてよい。つまり、その混沌として判別できないもの、それこそが道というのである。見ようとして見えない。明るいのか暗いのか、ぼんやりとして霧のごとく漂う気。天地が作られる前のガス状の宇宙である。全てはここから始まる。

その意味で、「道教とは何か」という問いに対して、「気

トップページにもどる

の宗教」と答えるのは、その本質を衝くものといえる。しかし、これだけでは道教を定義するものとはいえない。では、本書の内容全体から「道教とは何か」という解答が得られるかといえば、それも少し問題が残る。やはり錬金術や気功などの方術に重点がかかる。おそらく読者は、道教とは？の解答を求めるであろう。それに対して「道教の歴史」を一章としたのは頷ける。複雑な歴史的解説を避け、簡明に時代の特徴のみを記述した方法は肯定できるが、「歴史」のとらえ方、あるいは「発展」という視点をどう説明するのか。

日本のなかの道教文化については、従来から指摘されたものが少なくない。「日本文化と道教」では、そうした従来の指摘にさらに著者の研究と見聞を加えた解説が新しい。著者が文献研究だけではなく、実地調査をも行つた成果が示されていて、研究の新展開を示唆するところである。

本書の内容にとりたてて異論を呈するものではない。むしろ、簡明に、正確に、そして多くの研究にもとづきながらの論説には、いつもながら感嘆させられる。ただし、『道教とはなにか』という書名は、冒頭に記したような経緯があるだけに、一考を要するものと考ええる。確かに、道教の思想や儀礼、方術の中で気のもつ役割は大きい。しかし、それだけで道教を説明できるとは思われない。そこで、敢えてこのような評を書いたのである。益々の健筆を祈る次第である。